

御嶽山の火山活動の状況について

令和2年2月14日（金）

御嶽山火山防災協議会

御嶽山の火山活動の状況

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

噴煙活動や山頂直下付近の地震活動は緩やかな低下が続いています。一方、2014年に噴火が発生した火口列の一部の噴気孔では、引き続き噴気が勢いよく噴出しています。＜噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）を継続＞

※突発的な火山灰等のごく小規模な噴出に必要な範囲を、これまでは活発な噴気がみられていた3つの噴気孔から概ね500mの範囲としていましたが、令和元年6月21日に、東側の噴気孔を除いた2つの噴気孔から概ね500mの範囲に変更しました。

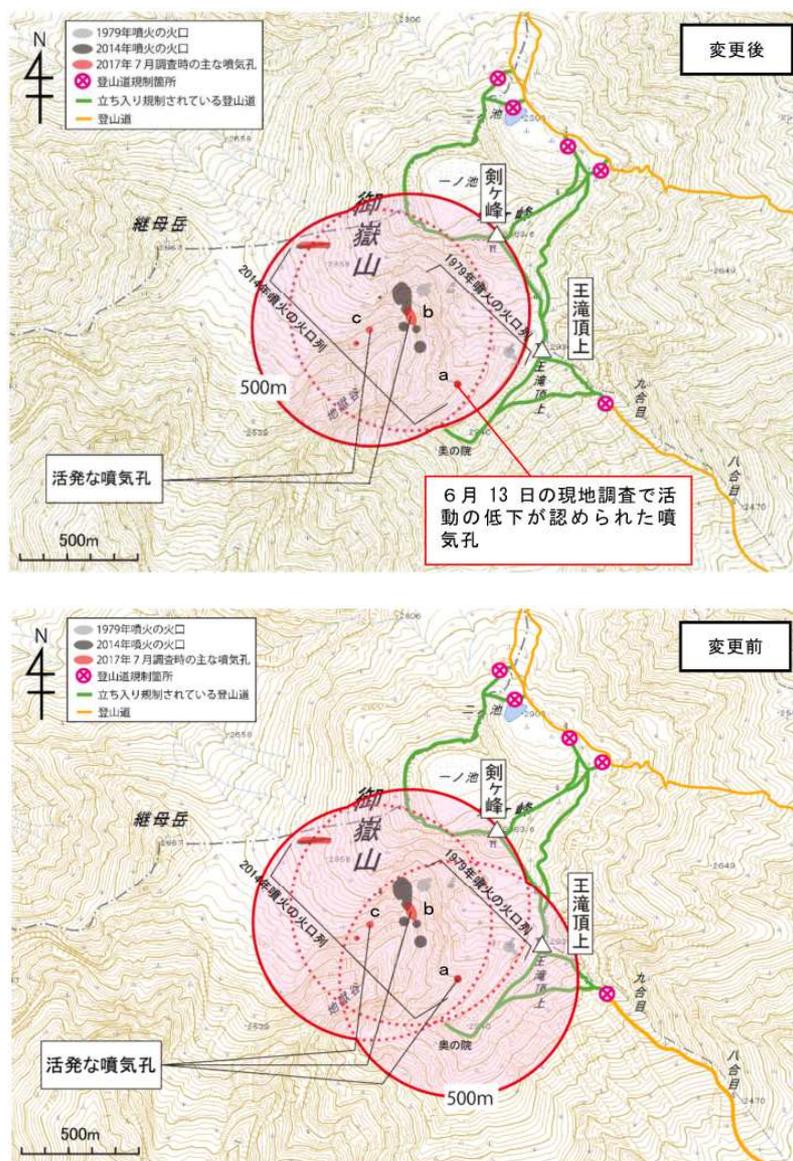


図1 御嶽山 注意が必要な範囲（上段：変更後、下段：変更前）
・赤実線で示す活発な噴気孔から概ね500mの範囲では、突発的な火山灰等のごく小規模な噴出に注意が必要です。

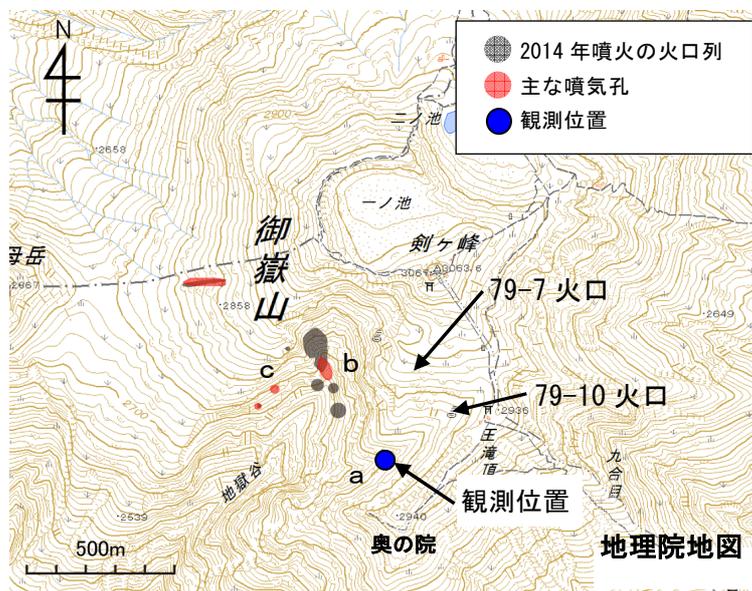
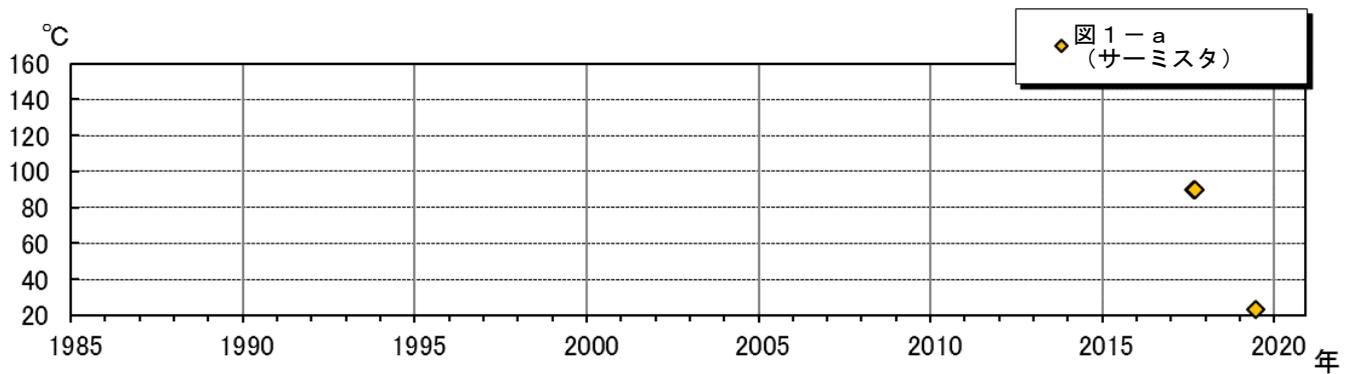


図2 御嶽山 剣ヶ峰山頂の南西側の火口列の東側の噴気孔 (図1にaで示す) の状況
 ・2019年6月13日に実施した現地調査では、2014年に噴火が発生した剣ヶ峰山頂の南西側の火口列の3つの活発な噴気孔のうち、東側の噴気孔の噴気孔内の温度は23.3°Cと、前回観測 (2017年9月14日、89.8°C) と比較して明瞭な温度の低下が認められました。また、同噴気孔の噴気の勢いは、前回観測 (2017年9月14日、右上図の写真右下に写るものが噴気) と比較して明瞭に低下していました。

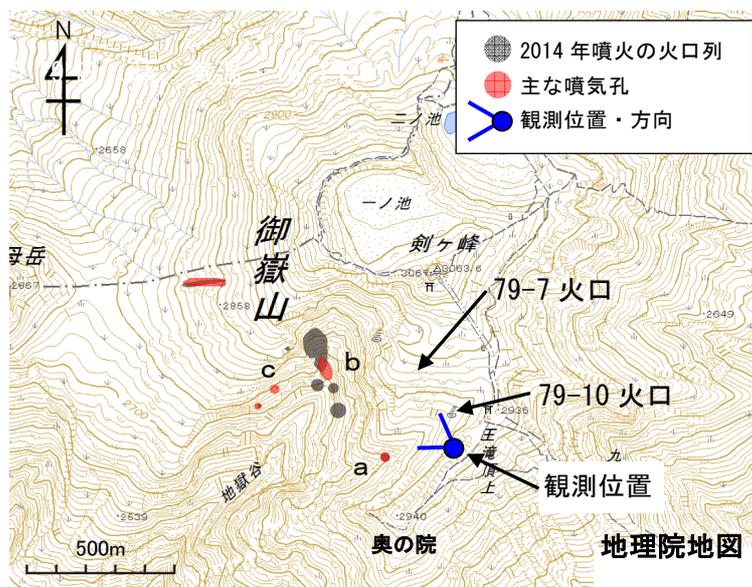
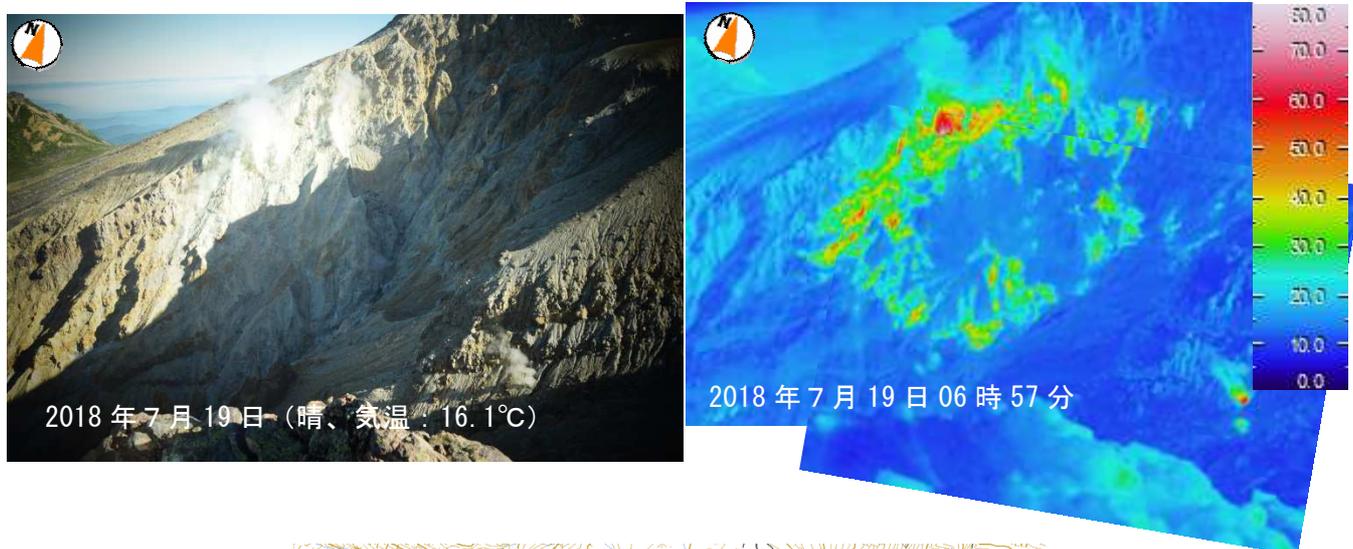
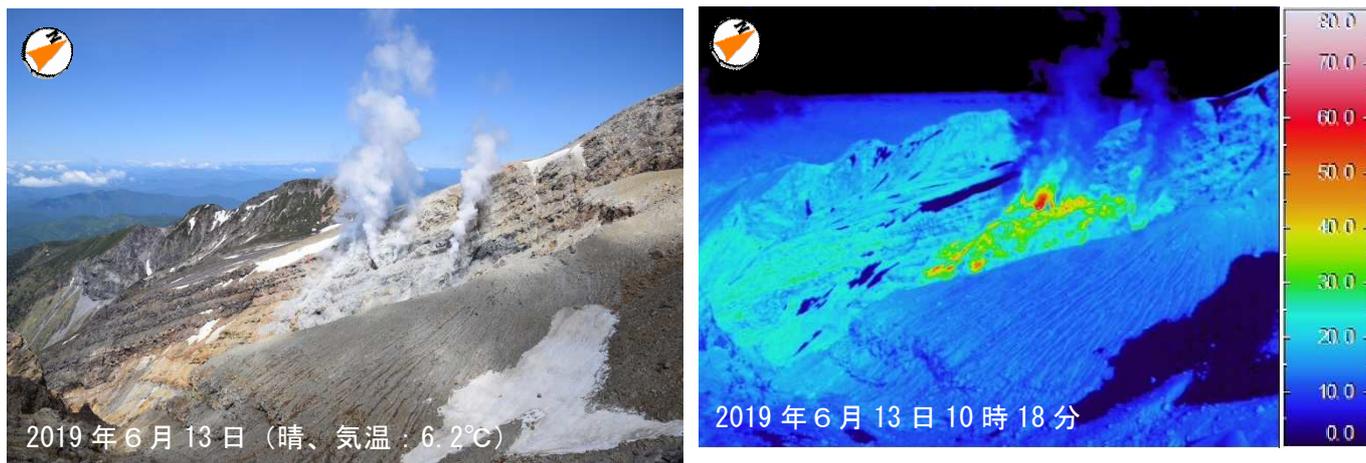


図3 御嶽山 地獄谷 (図1のb, c) の可視画像と赤外熱映像装置による地表面温度分布

(奥の院より撮影)

- ・2019年6月13日に実施した現地調査では、2014年に噴火が発生した剣ヶ峰山頂の南西側の火口列の一部の噴気孔で、引き続き活発な噴気活動がみられ、温度の高い部分が認められました。

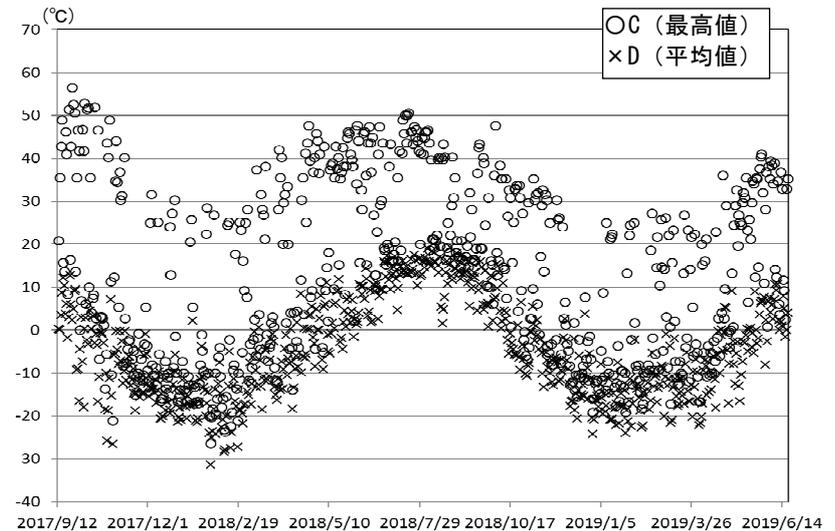
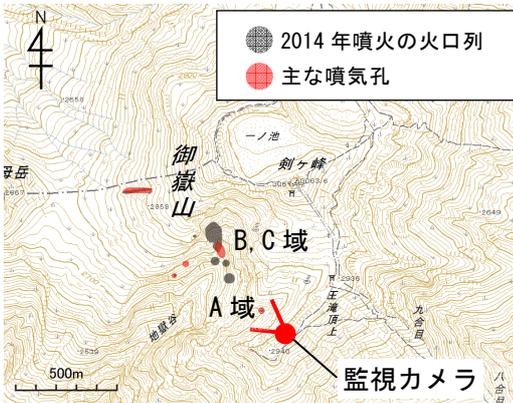
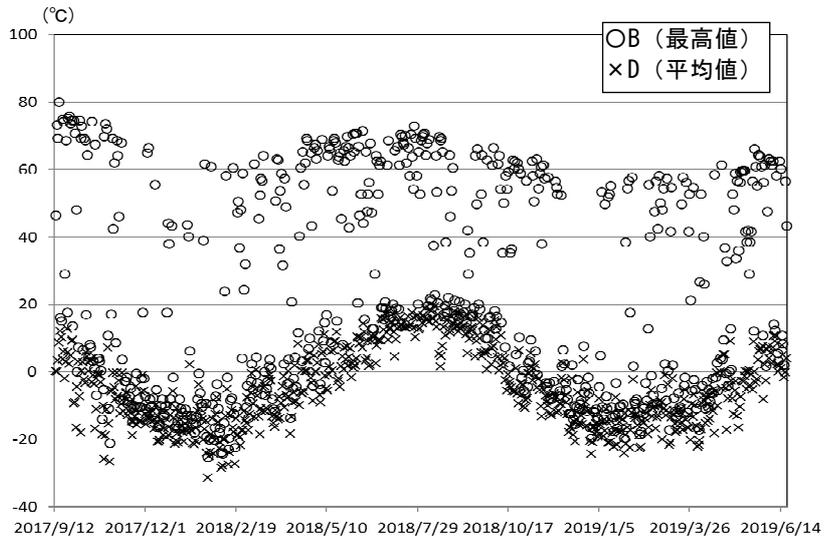
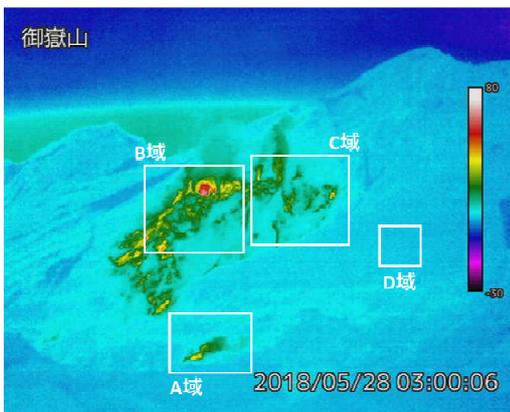
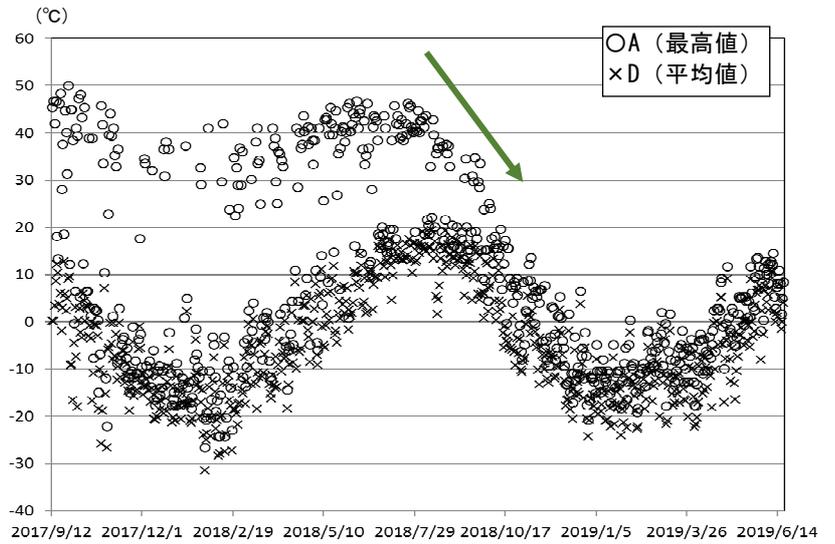
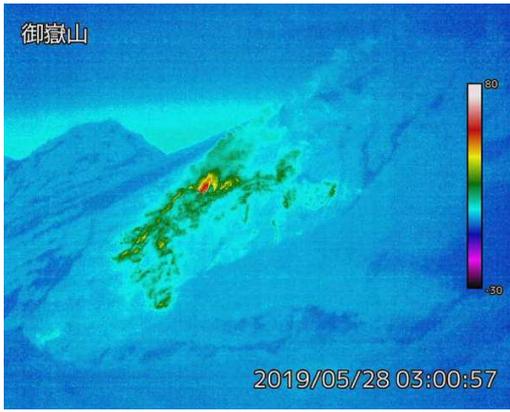


図4 御嶽山 奥の院赤外熱映像カメラによる剣ヶ峰南西側における最高温度の推移 (2017年9月13日~2019年6月19日) と同カメラの位置 (Oikawa et al., 2013 に加筆)

A~Cは地熱域、Dは非地熱域を示します。

・年周変化は見られるものの、B及びC域については長期的な低下傾向となっており、A域の温度は2018年秋頃から明瞭な低下傾向が認められます (緑矢印)。

※A域内に、6月13日に実施した現地調査で噴気の勢いや噴気孔内の温度の明瞭な低下がみられた噴気孔 (図1-aで示した噴気孔) が含まれます。また、B域内には図1-cで示す噴気孔が、C域内には図1-bで示す噴気孔が含まれます。



図5 御嶽山 山頂部の噴煙の状況 (左図：三岳黒沢監視カメラ(剣ヶ峰山頂の南東約15km、1月10日)、右図：中部地方整備局の滝越設置の監視カメラ(剣ヶ峰山頂の南南西約6km、2020年1月10日))

- ・2014年9月27日に噴火が発生した剣ヶ峰山頂の南西側の火口列からの噴煙活動は、長期的には低下しているものの、引き続き一部の噴気孔からは勢いよく噴気が出ています。

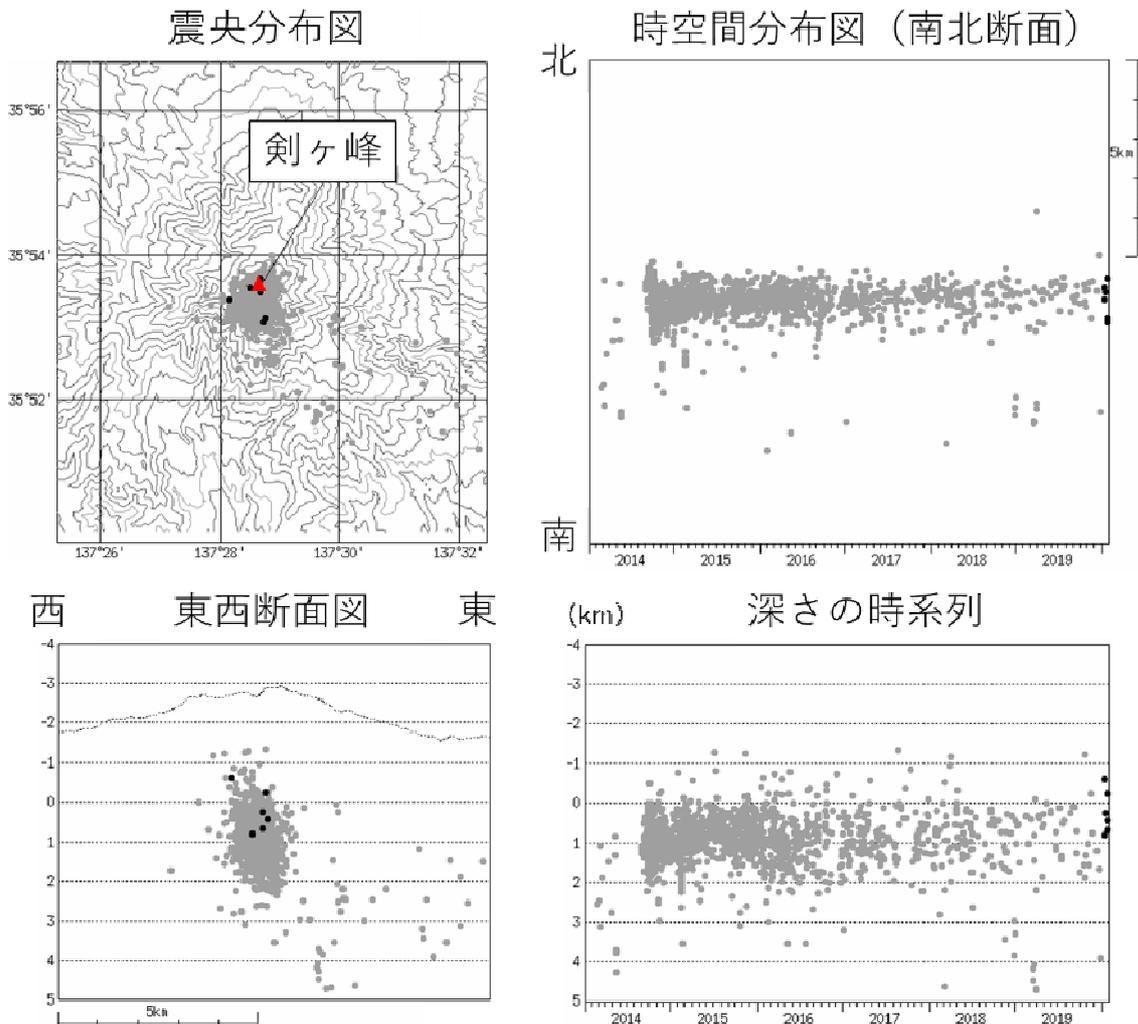


図6 御嶽山 震源分布図 (2014年1月1日～2020年1月31日)

●：2014年1月1日～2019年12月31日 ●：2020年1月1日～1月31日

※観測点の稼働状況によって、求まる震源の数が減少したり、位置などの精度が低下したりする場合があります。

- ・発生した地震の震源は、剣ヶ峰山頂付近のごく浅いところから深さ1km付近に分布しており、特段の変化はありません。

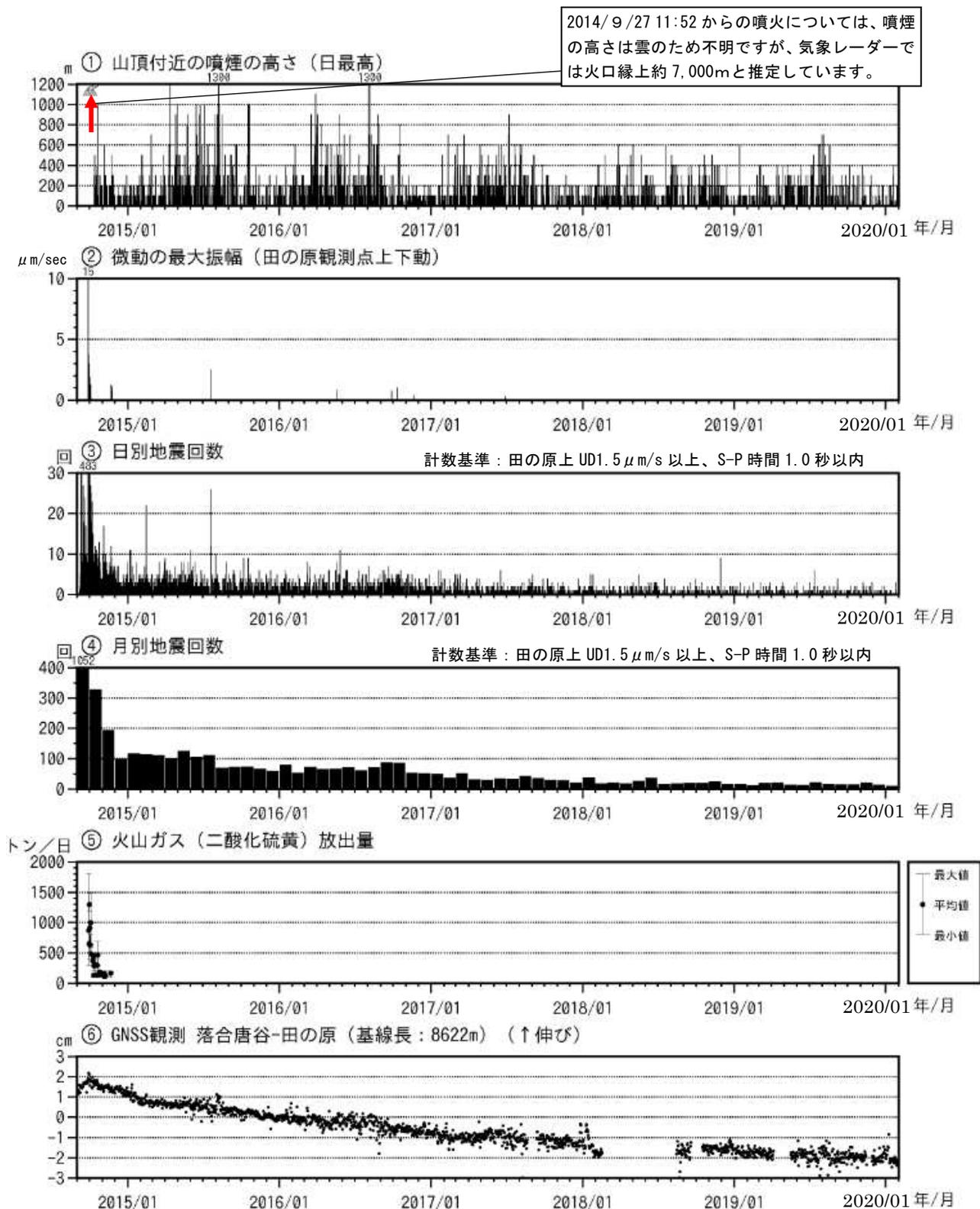


図7 御嶽山 最近の火山活動経過図 (2014年9月1日~2020年1月31日)

- ①監視カメラによる噴煙の高さ 噴煙の高さは日最大値。
矢印は噴火発生を示します。また、視界不良時には噴煙の高さが表示されていませんが、2014年9月27日の噴火発生以降は噴煙が連続的に発生しているものと考えられます。
- ②火山性微動の最大振幅は田の原観測点の上下動振幅です。
- ⑥図6のGNSS基線⑤に対応した基線長の変化を示します。空白部分は欠測を示します。2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。